

司式：大谷 昌恵

奏楽：堀口 恵美

前奏：「われ汝を呼ぶ、主イエス・キリストよ」(J.S.バッハ)

招詞：主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。(ミカ4:3)

讚美歌 20 主に向かってよこび歌おう

交読詩編 107:1-9

- 01 「恵み深い主に感謝せよ/慈しみはとこしえに」と
- 02 主に贖われた人々は唱えよ。主は苦しめる者の手から彼らを贖い
- 03 国々の中から集めてくださった/東から西から、北から南から。
- 04 彼らは、荒れ野で迷い/砂漠で人の住む町への道を見失った。
- 05 飢え、渇き、魂は衰え果てた。
- 06 苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らを苦しみから救ってくださった。
- 07 主はまっすぐな道に彼らを導き/人の住む町に向かわせてくださった。
- 08 主に感謝せよ。主は慈しみ深く/人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。
- 09 主は渇いた魂を飽かせ/飢えた魂を良いもので満たしてくださった。

ミカ書 6:6-8

◆主の告発(後半)

- 06 何をもって、わたしは主の御前に出で/いと高き神にぬかずべきか。焼き尽くす献げ物として/当歳の子牛をもって御前に出るべきか。
- 07 主は喜ばれるだろうか/幾千の雄羊、幾万の油の流れを。わが咎を償うために長子を/自分の罪のために胎の実をささげるべきか。
- 08 人よ、何が善であり/主が何をお前に求めておられるかは/お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し/へりくだって神と共に歩むこと、これである。

マタイによる福音書 5:9

- 9 平和を実現する人々は、幸いである、/その人たちは神の子と呼ばれる。

### 祈祷

聖なる主なる神さま、聖名を崇め、賛美致します。連日、暑さが続いていますが、今日も私たち夫々に新しい命を与え、呼び起こしてください、この礼拝の場へとお招きくださいましたこと、心より感謝致します。暑さの中で身も心も疲れを感じている私たちではありますが、御前に進み出て、あなたに賛美とお祈りを献げし、御言葉を賜ることができる幸いに、大きな喜びを感じております。

先週、私たちは平和聖日の礼拝をお献げ致しました。しかし平和を願う気持ちは、その日一日だけで終るものではなく、8月は特に平和について思いを巡らす時であります。6月23日の沖縄慰霊の日が始まって、8月6日の広島原爆投下、9日の長崎原爆投下の日、そして15日の敗戦の日と続く夫々の日に、私たちは改めて平和の尊さと大切さに思いを深くします。また、今年は特に、戦後80年という節目の年であります。実際に、先の大戦を経験した人々が少なくなり、戦争体験の継承が難しくなっていると言われております。しかし、そのような時だからこそ、なお一層、私たちは力を込めて平和を願い、この地上から人と人との争いがなくなるように、と願わなければなりません。

神さま、過去の過ちを私たちが心から悔い改め、あなたが造ってく

だされたこの大地に平和がもたらされることを願う私たちに、どうかあなたのお導きと力をお与えください。今もなお、この世界には国と国との争いが続いています。そして多くの尊い命が奪われています。これ以上、人々の血が流されることのないように、特に子供たちが傷つくことのないように、必要な知恵と力とを私たちにお与えください。この8月をそのために改めて歩み出す時としてください。

神さま、本日は笠原義久先生が御言葉の取次ぎをしてくださいます。どうぞ笠原先生の上に聖霊を豊かにお注ぎください。そして先生が大胆に豊かに御言葉を語ることができるようにお支えください。

今日、この場を覚えながらも集うことができなかった多くの友がいます。心と体に弱さを抱えている方、お年を召してこの場に来ることが叶わない方もいらっしゃるかもしれません。また、旅先でこの主日を過ごされていらっしゃる方もおいでのことと思います。どうか、夫々の上に、この場にいる私たちと同じ祝福とお恵みをお注ぎください。そして、いずれまた、共に礼拝を守ることができるよう、その時までの日々をお守りください。

今日、全国の諸教会で御前に献げられている礼拝の場にあなたがいてくださって、そのすべてに豊かな恵みをお注ぎください。特に、困難な状況にある教会の礼拝をあなたが祝してくださいますように。

この感謝と願いの祈り、私たちの主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

讚美歌 58「み言葉多くください」

講壇「へりくだって神と共に」 笠原義久

人よ、何が善であり、主が何をお前に求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。(ミカ6:8)

アメリカ合衆国の第39代の大統領ジミー・カーターは、1977年の大統領就任式において、旧約聖書ミカ書6章8節のこの言葉を引用して就任演説を致しました。カーターは南部バプテスト連盟系列の教会の信徒で、ジョージア州にある教会の教会学校の教師の経験もありました。ですから、このように聖書の言葉を引き合いに出すことは、当然自明のことであつたに違いありません。カーター大統領は、自分の大統領在任期間の終わりに、“アメリカ国民が次のように言うことができれば”という一つの希望を表明しています。すなわち、“我々は預言者ミカの言葉をいざづらに思いを起こすことはない。我々のへりくだり、謙遜への努力、恩恵、また、正義は、すでに新しいものとされているのだ。”“そのように言うことができれば”という希望であります。“神から求められている正義、慈しみ、へりくだりは、私たちのうちに、すでに現実のものとして実現したと言い得るような国を、また世界を作ろう”、さらにそれを踏み台として、“新しい正義と慈しみとへりくだりへと一歩踏み出すような、そういう状況を作り出そう”、これがカーターの決意と希望の表明であつたように思われます。

私は、カーターのこの発言は、彼が一国の為政者、しかもアメリカという国の最も上にある権威が為した発言だけに、非常に『重い』発言だと受け取らざるを得ない。この『重い』ということには二つの意味が含まれています。第一は、人々の間に、民族や国家、諸国民の間に、正義を行ない、慈しみを愛し、へりくだって、神と共に歩むという、三つのことが貫かれない限り、本当の意味での安全と生存を保持することができないという、そう言う理念に立ち、この理念への忠誠を誓い、国民にもこの理念に従つ

て努力するよう訴えたという、その事実であります。

『重い』ということの第二の意味は、まさにアメリカという大国、世界の盟主と自負する国の最も上に立つ者の発言であるという、そういう事実です。そこではアメリカという国の正義とは一体何なのか？が問われなければなりません。その当時、社会主義陣営からの脅威を理由にして、核を基軸とした世界戦略を推し進めてきたアメリカという国、核兵器の体系というものを後戻りできない程に高度に発達させ、核抑止力神話を崩壊させ、限定核戦争というものを現実可能なものにさせ、さらに全面核戦争までも現実の脅威とさせたこの大国の正義とは、はたしてこの何であったのか、ということでもあります。

アメリカの正義を正義と呼ぶなら、私たちは実に数え切れないほど多くの正義の要求の中に囲まれていると、そのように言って過言ではないでしょう。自分の国の自分の属する集団、世界に対する正当性の拡大、支配権の拡大の契機となるもの、それが正義という言葉で呼ばれている、そういう感じさせます。私たちは今朝もう一度聖書に立ち返って、主があなたに求めておられること、それは“正義を行ない、慈しみを愛し、へりくだって神とともに歩むこと、これである”という御言葉に聞くよう求められているように思います。

さて、このミカという預言者は、その生きた時代も、また預言自体も、あの大預言者イザヤと重なるところが多く、したがってイザヤの影に隠れて目立ち難い存在であります。実際彼は、エルサレム南西のユダの丘陵地にある農村出身の素朴な農夫、圧迫されていた小農民や牧畜民の仲間でありました。エルサレムの都にあつてダビデの血を引くユダの王朝と深い関係にあったイザヤとは対照的であります。ミカの預言には、小さな抑圧されている農民であるが故に受けた苦い経験というものが、私たち聞き取ることができます。また、大都市住民の贅沢で爛熟した生活ぶりに対する激しい非難の言葉も預言の隅々に語り込まれています。力と富に恵まれた都市の社会的強者に対して臆することなく立ち向かい、富める者、また、自らの利益の追求によって自分本来の職務を忘れていた偽りの預言者や祭司に対する非難の言葉は本当に厳しく、また、鋭いものがあります。

例えば、ミカ書

2:1「災いだ、寝床の上で悪をたくらみ、悪事を謀る者は。夜明けとともに、彼らはそれを行う。力をその手に持っているからだ。彼らは貪欲に畑を奪い、家々を取り上げる。住人から家を、人々から嗣業を強奪する。」

さらに、3:9以下、

「9 聞け、このことを。ヤコブの家の頭たち、イスラエルの家の指導者たちよ。正義を忌み嫌い、まっすぐなものを曲げ、10 流血をもってシオンを、不正をもってエルサレムを建てる者たちよ。… 12 それゆえ、お前たちのゆえに、シオンは耕されて畑となり、エルサレムは石塚に変わり、神殿の山は木の生い茂る聖なる高台となる。」

ここでハッキリ語られているように、ミカはエルサレムとエルサレムの神殿の破滅をあからさまに預言した最初の預言者として記憶に止められなければなりません。ミカ書の全般に見られるように、ミカは、確かに、国民生活における不義を糾弾し、とりわけ、富んでいる者、権力の座にある者の社会的不義を激しく弾劾し、イスラエルに対する神の裁きが逃れ難いことを繰り返し、繰り返し訴えた、そういう預言者でした。けれども、裁きの告知というのは、同時に救いの告げ知らせです。徹底した裁きは、同

時に徹底した救い、これが旧約の預言者に一貫して見られる預言というものの基本的な性格であると、そのように言うてよいでしょう。

さて、先ほどお読み頂いた聖書箇所少し前の3節にはこうあります。「わが民よ。わたしはお前に何をしたというのか。何をもちてお前を疲れさせたのか。わたしに答えよ。」、とりわけ、「何をもちてお前を疲れさせたのか」という言葉の中に、裁きと救いについてのミカの鋭い洞察を見ることができます。神はイスラエルの状況、民の状況というのを「疲れている」と、そのように見えています。そして、民が疲れている事の原因が何であるのか。その問いを、神は自らに対して投げかけています。神は自らの尊厳にとらわれているような、そういうお方ではありません。そうでなく、自らのへりくだりにおいて、ご自身に対してもう一度問いを發し、疲れた民との和解の道をご自分の方から開こうとしておられるのです。

そのことを知り、6節の最初の言葉を聞くとき私たちは、神のそういう姿勢が、預言者を通して開き示された神に対するそういう神の姿勢というもの、イスラエルの民にある方向転換をもたらしたことを知らされるのです。すなわち、「何をもちて、わたしは主の御前に出て、いと高き神にぬかずべきか」、これはイスラエルの民の一つの信仰告白です。彼らは、これまで、自分たちの不幸を、すなわち、周辺国家の圧倒的な軍事力の前に、荒海を漂う小舟のように弄ばれている小国ユダの不安定な政情の原因というものを、イスラエルとの間に交わした契約というものを神が一方的に守らなかつたからだ、神の契約不履行だと、そのように主張して譲ることがありませんでした。しかし、今、イスラエルの民の側に、或る大きな変化が、方向転換が起こっています。民全体の救いというものを約束された神との契約で忠実でなかつたのは、神ではなくて自分たちの方なのだ。正義は、自分たちの側には無い。疲れていたのは自分たちが神を見失っていたからに他ならない。罪はわが前にある。この罪を携えて、再び神との交わりの場に赴こう。これが民の側に起こった重大な方向転換、変化であると、それように言うてよいと思います。

ところで神との交わりの場というのは、いったい何処にあるのでしょうか。イスラエルの民は神殿での祭儀に、祭儀の中心を成す犠牲の祭儀にその場を求めます。神との交わりの場というものは、まさに犠牲の祭儀に、そこにあるのだと。イスラエルの祭儀の伝統によれば、“人は神の前にむなしい手で、つまり何も持たないで神の前に出てはならない”とされてきました。出エジプト記(34:20)には“誰もむなしい手でわたしの前に出てはならない”と、そのようにあります。6節後半、民は律法で定められている犠牲の供え物、燔祭、そしてとりわけ貴重と考えられていた「当歳」の、つまり、その年に生まれた子牛から始めてどんな代価を払っても神との完全な交わりを持ちたいという、そういう渴望から、自分の長子まで犠牲として献げる、そういう用意もあるのだと、そういう激しい問いを突き付けます。長子を献げても、神との交わりの回復は、すなわち、完全な和解というものはできないのか、どうなのかという、そういう問いかけです。

イスラエルの祭儀というのは一言で言えば、神と人との交わりを保つ、そういう機会です。それは交わりの唯一の手段ではないとしても、常に中心的な位置を占めて来ました。神と人との交わりに奉仕するため、この交わりが支障なく行われるために、祭儀というものが存続していたのです。神が和解の神として人と出会い、人が秩序正しく罪を清められ、赦される機会として神によって備えられたもの、それがイスラエルの祭儀の本質で

あると、そのように言って良いと思います。

イスラエルの民は、6節、7節で、そういうイスラエル祭儀の本質に則って神への問いを突きつけているのです。けれども8節で預言者ミカが民からの鋭い問いかけに対して与えている答えは、実に意外であると、そのように言うべきでしょう。この言葉です。

人よ、何が善であり、主が何を前にお求められるかは、前にお告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。

“答えは既に神から十分に与えられるではないか。答えは良きこと一つしかない。正義を行うこと、慈しみを愛すること、へりくだって神とともに歩むこと、これ以外に答えはないではないか”、というのです。

これでは全然答えになっていないのではないかと私たちはそのように思います。けれどもこの8節は、実は6節、7節のイスラエルの民の問い、それ自体に対する根本的な批判となっているのではないのでしょうか。根本的な批判、その第一の批判、それはあくまでも神と対等に立とうとする人間の傲慢、不遜の思いに対する批判であります。祭儀というものは、人間がその罪を赦されるためのあくまでも一つの機会、神の定められた一つの秩序であって、人間の側がこういうものを差し出せば赦される・赦されないというように、罪の赦しのためのいわば条件闘争を当たり前のこととし、神と対等に互い合おうとする、そういう傲慢に対する批判であります。

第二の批判、あなたは確かに献げ物としてすべての貴重な所有物、わが子に至るまで献げようとしている。しかし、一番大事なものを忘れてはいないだろうか。あなた自身の身はどうなっているのか。祭儀の本来の意味は、自らを献げて、すなわち宥めの供え物として献げて和解を得ることであって、犠牲の動物はあくまでもその代わりであるという、そういう決定的な点が忘れられているのではないか、という批判であります。

第三の批判、それは、どんな代価を支払ってもよいという人間の思いが如何に切実なものであろうとも、国民生活における不義が除かれぬ限り、神はどんな祭儀も決して“善し”とはされないという、そういう預言者ミカの確信です。ミカはここで祭儀そのものを、神が定めた秩序としての祭儀そのものを批判しているではありません。自分をまるごと献げずして行われる祭儀、人間の料簡や都合で勝手に操作され、赦しの交換条件となっている祭儀、同じ共同体の中の不義不正に目を留めず、自らの利益と保身を図っている人を中心になされる祭儀に対し、ミカは根本からの“ノー”を叫んでいるのではないのでしょうか。

それでは、8節で語られている「善」、良き事、すでにあなた方には告げられていると言われている良き事は一体何でしょうか。少し前の4節から5節では、出エジプトの出来事、一人の神を礼拝する一つの礼拝共同体としてのイスラエル成立の出来事が集約的に語られています。この神の恵みの業によって成立したイスラエルが神の民に相応しく生きるために与えられた十戒、この十戒に聞き従って生活すること、端的にはこれが良き事だと、そのように言ってよいでしょう。ミカはこの十戒の基本精神を、正義を行うこと、慈しみを愛すること、へりくだって神とともに歩むこと、この三つの原則の中に十戒の根本的なこの基本精神というものを見えています。

旧約聖書の中で言われている「正義」というのは、もともと、“一定の生活状態に適用すること”という意味を持っています。従って“正義を行う”と言うことは“一定の生活状態の中で正しい関係が保たれ、その共同体に含まれる一人ひとり

が、その本来の姿において十分に尊重され、擁護される”と言うことです。「正義」が行われなければ、その共同体の成員・メンバーがその本来の姿において十分に尊重され、擁護されることがなければ、どのような共同体も立ち行かない。これが聖書の一貫した姿勢、「正義」、「正義を行う」ということの意味であると、そのように言ってよいでしょう。

それでは、私たちにとって今日、“正義を行う”とは果たして何でしょうか。“正義を行う”ということは、共同体の成員が、共同体のメンバーが、その本来の姿において十分に擁護されるということ、十分に尊重され守られるということ、そのように申しました。メンバーの一人ひとりが、意味に満ち人格としての存在であるのは、私たち人間一人ひとりが神の似姿として神によって造られた存在だということその事実に基づきます。その神が、私たちが、自分の似姿に相応しく生活するために、恵みとして与えてくださった戒めに聞き従うということ。“正義を行う”ということはまさにそのことです。「正義」というのが単なる理念としてなってしまうと、自らの正当性と支配力を拡大させるための偽りの「正義」というものが渦巻いている中で、私たちは改めて、へりくだった心を持って、神の愛と正義に対して、私たちの生、命を献げていきたいという、そういう祈りを熱くしたいと切に願うものです。

冒頭でお話した、ジミー・カーターのあの就任演説の32年後、アメリカの第44代大統領オバマは、就任した2009年、歴史に残るであろうブラハ演説を行ないました。彼は次のように言いました。

今日の世界の平和にとって根本的な課題は、21世紀における核兵器の未来という問題であり、この世紀、世界中の人々が恐怖無い生活を送る権利を求めて共に戦わなければならない。

と、さらに続けて、こう言いました。

核保有国として核兵器を使用したことが有る唯一の核保有国として、アメリカは行動する道義的責任があります。アメリカだけではこの活動で成功を収めることはできませんが、その先頭に立つことはできます。本日、私は、アメリカが核兵器のない世界の平和と安全を追求する決意であることを、信念を持って明言致します。

この礼拝の司式者の祈祷の中にもありましたけれども、この15日、私たちは80回目の敗戦記念の日を迎えます。分断と対立が深まり、各地で戦火が絶えない状況下、オバマの決意とは全く正反対の方向に舵を切りつつあるアメリカ。憎悪と虚偽が増幅し、サタンの跳梁が勢いを増しているかに見える世界と日本の状況。そういう中で、私たちは、今朝の預言者ミカの言葉「へりくだった心を持って、神の愛と正義に対して、私たちの生、命を献げて行きたい」、そういう祈りを篤くして行きたいとそのように願うものです。

お祈りします。

主よ、語りました言葉をあなたの聖霊の働きによって生ける命の御言葉にしてください。

この時間の中で、御言葉が私たちすべてを慰め、勇気づけ、励まして下さること。そしてそのことが、私たちの間に、近くや遠くのありとあらゆる場所に興るよう切に祈り願います。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 425「こすずめも、くじらも」

献金・感謝・主の祈り(小林正道)

天の父なる神さま、主の聖名を崇め心より賛美致します。今日、この聖

霊降臨節第10主日礼拝を礼拝堂において、またライブ配信において礼拝を  
献げられた恵みを感謝致します。

今日は笠原先生を尊く用いてくださり、私たちにミカ書、マタイ伝より  
多くの恵みを戴きました。正義を行い、謙虚さをもって慈しみ深く神さま  
にお従いする大切さを教えていただきました。ありがとうございます。ど  
うぞ、これらの糧を深く私たちは心の中にとどめ、これからの信仰生活の  
糧として歩むことができますように導き助けてください。神さまが私たち  
を、御言葉をもって生かしてくださっていること、その栄光を褒め称える  
思いを持たせてください。

私たちは今、神さまから戴いた蓄えの中から、その一部を献金として献  
げました。どうぞ清めてこれからの信仰生活、教会生活にお役立てくださ  
い。主が示された『主の祈り』を共に献げ、新しい日々を歩ませてください。  
…「主の祈り」アーメン。

派遣：讚美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりとが、とこしなえに  
あるように。アーメン。

報告：週報記載の以外特記事項無し。

後奏：「われ汝を呼ぶ、主イエス・キリストよ」(J.L. クレーブス)